

「行為時の感情喚起が虚偽検出検査時の末梢指標に及ぼす影響」正木綾乃（関西国際大学）

目的

我が国の虚偽検出の研究において、生理心理学の実験的研究で評価が高い Concealed Information Test (CIT) が使用されている。これまで、虚偽検出の生起メカニズムにおいて認知要因の重要性が主張されてきた。一方で他の要因については軽視されており、特に情動要因に関しては直接的な関与はないと避けられてきた。しかし、先行研究において虚偽検出に情動が深く関与していることは明らかとなっており、覚醒に焦点をあてた研究においては、大杉（2005）は自己の行為によって覚醒する自己行為覚醒について検討しており、Peth（2012）は自分以外によって覚醒する他動的覚醒について検討している。

本実験では、自己行為覚醒と他動的覚醒のいずれが検出率が良いのかを検討した。さらに、模擬犯罪課題後1週間おいてから本実験を行い、イベント内容が及ぼす中心事項と周辺事項の再認率についても較をおこなった。

方法

実験参加者 健康な男女大学生（18–22歳、平均20.5歳）。

実験手続き 模擬犯罪課題では、まず、実験参加者は部屋のホワイトボードを10秒間眺めた後、作業台にある複数の貯金箱から1つだけ選択し、貯金箱の中にあるメモを取り出すよう指示された。ここで、メモを取り出す際に貯金箱をハンマで破壊する群を破壊行為群、関係者の侵入がある群を侵入者群とし、破壊行為も侵入者もない群を統制群とした。その後、メモに書かれているものを盗み出し、回収箱に入れてくるように指示された。模擬犯罪課題から1週間後に虚偽検出検査を行った。本実験終了後、再認テストを行った。感情喚起度を測定するため、日本語版 UMACL 短縮版 (JUMACL) を用いて覚醒度の測定を計4回行った。刺激 5種類の刺激（腕時計・電子辞書・USBメモリ・ipod・携帯電話）であった。

結果

SCR 群(3)×質問内容(2)の2要因分散分析を行ったところ質問の主効果($F(1,28)=9.84, p<.01$)と質問の内容と群の交互作用 ($F(2,28)=3.48, p<.05$) が有意であった。さらに、各群で裁決項目と非裁決項目のSCRの平均値を算出したところ、破壊行為群では裁決項目は0.63、非裁決項目は0.56であり、侵入群では裁決項目は0.62、非裁決項目は0.53であった。しかし、統制群では裁決項目は0.54、非裁決項目は0.55であったことから、統制群の裁決項目よりも高覚醒群でSCR振幅の増大がみられた(図1)。

呼吸 呼吸時間、呼吸振幅共に群(3)×質問の内容(2)の2要因分散分析を行ったところ、呼吸時間でのみ質問の主効果が有意な傾向がみられた ($F(1,50)=3.626, p<.1$)。

再認テスト 実験参加者ごとに中心事項と周辺事項の平均をだし各群ごとに正解率を比較したところ、破壊行為群では中心項目が0.95、周辺項目が2.32、侵入者群は中心事項が0.95、周辺事項1.53であった。統制群では中心事項が1.53、周辺事項が2.16であった。各群ともに中心事項よりも周辺事項の方が成績が良かった。

考察

SCRの結果より、破壊行為群・侵入者群と統制群との間でのみ差が認められたが、破壊行為群と侵入者群との間で差は認められなかった。つまり、自己行為覚醒と他動的覚醒とで差はないことが明らかとなった。

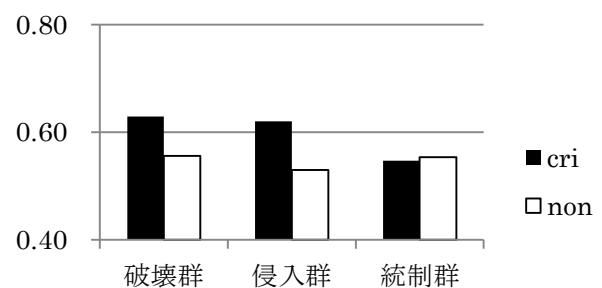


図1 各群のSCR平均値